

# Shape

著 ピーすけ



ひなゆめファンの止まり木

-Prologue-

深々と積もる雪と身を刺すような寒さが、夜の莊嚴さを侵すことを厳しく咎めるかのようには、人や獣を各々の住処へと押し込めている。それでなくとも午前一二時という時間は、本来草木も眠る時間である。余程の理由がある者を除けば、外を出歩くような輩は居る筈もない。

だが、純白の景色を重い色でくり抜いて、そぞろ歩く人影が一つ。無垢の絨毯に軌跡を刻むのは、年不相応なほどに草臥れた少年であった。

毛糸の解れた手袋と襟巻。野暮ったい厚手の外套と長靴も、擦れて生地表面が毛羽立っている。作りは十人並み以上といえる女性のような顔つきも、擦れ

た物を見てきたかのような乾いた眼差しのせいで、どうにも貧相な印象の方が先に立つ。

少年は、肩に積もった雪を手で払い落とすと、外套の衣囊いのうから缶コーヒールを取り出して両の掌を温めた。つい先ほど通りがかりに見かけた自販機で買ったものである。白銅硬貨と青銅硬貨が合計で三枚必要だった。

財布が寒くなったぶんを取り戻すべく、手袋越しにその温かさを味わった。そして十分に堪能した後、いよいよ次の段階、今度は体内を温めるべく行われる筈の一連の動作は、タブに指を掛けるという最初の段階で中断される。

「——from su……………of love …… ……roa……」

微妙に聞こえてきたのは、呟くような、だが美しい音の連なり。雪の合間を

縫ぬって、彼の耳に届いたそれは、一条の旋律せんりつ。今までは彼自らの立てる足音に隠れていたので気付かなかったが、さらに澄すまして耳を傾けてみると、その旋律は詩の付いた歌であった。どうやら、風の悪戯いたずらを音楽と誤解ごかいしたわけではないようだ。

「Call…… to……d…… e……in…… to……」

少年は温もりを再び元の位置に収める。

もしかすると、自分以外にもこんな夜に外を出歩くような奇特な人間が居るかもしれない。興味に惹かれるままに、少年は歌声の方へと足を踏み出した。

「Jesus is callin…… weary to res……」

さくりと、雪を踏みしめる度に、靴の音が歌声の合間に相の手を打つ。

近づくにつれ、降りしきる雪のように臃おぼろげだった歌が、少しずつそのたおやかな輪郭りんかくを露あらわにしてゆく。

そうして辿り着いたのは、さなきだに人を厭いとう雪夜の中でも、一際侘わびしさの漂う公園。日の出た時間帯でも余り人の寄り付かぬそこで、錆びついた鎖に吊るされた、遊具の椅子いすの上に腰かけているのは、一人の少女だった。

街灯に淡あわく照らされているのは、雪が人の形を成したかのような白い肌と、白銀はくぎんの髪。そんな人間離れした容姿だからだろうか、首元くびもとを晒さらした、襟巻えりまきも巻かぬ出いで立たちは、むしろ雪の夜に溶け込んでいる。

「——Calling today, calling today, Jesus is calling, is tenderly calling today  
……」

ひとしきり歌い終えた少女は、ようやく来客に気付いたのか、伏せられた  
睫毛まつげを起こすと同時に、陶器のような白貌はくぼうにほんのりと朱を浮かばせる。途端とたん、  
少女の冷たい印象は鳴りなをひそめた。

「ええ、と……聞かれ……ちやいました……よね？」

少女は粗相そそうを言い訳する子供のようこに、紅玉こうぎよくの瞳を左右さまよに彷徨さまよわせる。問  
いは、何もかも聞かなかったことにしてほしい、という期待を言外げんがいに込めたも  
のだった。

「ええ。みりよくてき魅力的な歌声ですな」

だが少年は素直に感想を述べた。どうにもこの少年、女性の心の機微に鈍感なようだ。

それに、彼は殆ど無条件に、公園で一人きりになっている少女を放っておけない、という呪いに掛かってしまっている。無論、少女がそれを知ることが出来ないが、相手が容易には立ち去ってくれないお節介な人間である事だけは察しがついた。

「……うう、やっぱり」

少女は雪の肌を紅葉のようにして、俯うつむく。

「そんなに恥ずかしがらないでください。お上手でしたよ。讚美歌517番、ですよね」

「我に来よと主は今」の邦題で親しまれている、主の慈愛じあいを讃たたえる歌である。少年きりしたんは切支丹というわけではないが、一応最小限の讚美歌は知っている。耳に馴染なじみやすいこの曲を、記憶の倉庫から探り当てるのは容易たやすかった。

「……うん」

観念かんねんして、少女は卵型の頤おとがを縦に引いた。

歌を褒められて気を良くしていたというのもある。決して、彼女は抜きんで上手いというわけではないと自負している。だから、多少は世辞も交じっていることは解っていた。しかしそれを差し引いても自分の歌に好感を持ってくれていることは、真摯しんしな眼差まなざしから知れた。

「良い夜ですが、余り長居すると喉を傷めますよ」



少年はざっと辺りを検めた。足跡は一人分しか無い。

少女のコートは、厚手で生地も良さそうだが、とても氷点下の気温に長い間耐えられる程ではなさそうだった。

「人を、待っているのです」

少年の柳眉りゅうめいの根元に浅く溝が刻まれる。こんな日に、一体誰がいたいけな少女を外に放置していると言うのか。

「ああっ、違うの。私が勝手にやっていることだから」

慌わくろて取り繕つくろう少女。嘘うそ、ではなさそうだった。

「……はあ」

少年は息を吐きだすと、衣囊いのうの中へ乱暴に手を突っ込んだ。

びくり、と肩を震わせる少女。その胸へ向けて、缶コーヒーを放る。

「わ、わ。わわっ」

咄嗟とつさのことに反応の遅れた少女の手袋の間で、ぴよこぴよこと缶が跳ねた。

危うく取り落としそうなる寸前で、ようやくはっしと捕まえる。じんわりとした温かさが、少女の掌に広がった。

「今日は確かに良い夜ですが、ただ待つには寒すぎます」

「私は寒さにも慣れてしまったけれど」

出会ったばかりの人間にここまでされる道理もない。おどおどと遠回りに拒否しようとした少女に、少年の問答無用の笑みが押し掛かる。

「それでも、こうした方が温かいのは確かですから」

戸惑う少女の首に、ふわりと襟巻が巻かれる。

ちくちくと繊維せんいが首を刺す感触。少年の体温が残る毛糸は、包み込むようにして少女に温かさを分け与える。

「うええええええ!!」

好意を無下むげにもできず、少女はただ混乱するばかり。

「僕の趣味みたいなものですので、どうか受け取ってください。でなければ、こちらにも困ってしまいます」

「趣味って……人助けが、ですか？」

「正確には、寒そうな人に、温かさを分けてあげることが、ですかね」

少年はおどけたように肩を竦すくめてみせる。

「ふふ。ずいぶん随分と限定的なんですね」

思わず笑いを洩らしたことに、誰よりも少女自身が驚いていた。普通は見ず知らずにも等しい人間に、ここまで親切にされたら、感謝どころか警戒するところだ。無償の厚意ほど高くつくものは無い。だと言うに、旧知の間柄のように心を許してしまっている自分がいる。

「我ながら変わっているとは思いません」

「ううん、素敵だと思う」

少女も、思ったことをそのままに、言葉にする。気取った台詞もきつと彼はきつときほどの事でもないのだろうと思っていた。だが、意外にも少年は鼻面を指先でぽりぽりと搔かいて照れたような仕草をした。

少年はその表情を隠すように、視線を腕時計に落とす。長居をしたつもりはなかったのだが、分針は跳躍ちようめくでもしたかのように随分とその位置を変えていた。明日も早い。名残惜なごりしくとも、帰らねばならない時間だ。

「まだここに？」

「うん。もう少しだけ」

少女の声は控ひかえめだが、眦まなじりを決して答える姿からして、意思を曲げるつもりはないようだった。

二度目の溜息を小さく吐いて、少年は外套がいとうの襟を詰める。

「でしたら、その襟巻も差上げますよ」

質がいいとは言えず、気休め程度だが無いよりは幾分いくぶんましだろう。

「でも……いえ。うん、ありがとう」

顔をその中に埋めて、頬を緩める少女。

「……また、いつか会えたら、その時はこのお礼をさせてください」

別れの挨拶は簡潔に。あいさつ縁は繋がった。えにし同じ街に暮らすのなら。顔を合わす

事もあるだろう。

「ええ、それではまた」

去りゆく少年の背を、少女は小さく手を振って見送った。

それから、少女の下に再び訪う者が訪れたのはコーヒーが底をつき、少年の足跡が雪で上書きされた後だった。先程の細いシルエットの少年とは対照的な、いわおのみ巖を鑿で荒く削り出したような偉丈夫。落ち窪んだ眼の奥から覗く、昏い瞳。

赤いニット帽からは。短く刈りあげた白髪交じりの黒髪が覗く。

すじもの筋者の如き威容を前に、いようだが少女はぱつと、明るい笑みを浮かべた。

「お疲れ様。父さん」

「ああ、済まない。すっかり遅くなってしまうたな」

地鳴りの如き低い声。まやしや華奢な花を思わせる少女とは、余りに不釣り合いな男だった。

しかし、少女は父の不器用さを弁えている。父とて、わざわざここに寄らずに帰っても良かったのだ。なのに、仕事を終えたばかりの、疲れ果てた体を引きずってまで迎えに来てくれる。だからいつも、いつまでも彼女は待つてしま  
うのだ。

「冷えたらう。今日はもう帰ろう。仕事のことは、道すがらでも話す」

「うん。一緒に帰ろう」

少女はハミングを交え、上機嫌に足跡を刻んでいく。子犬のように息を弾ませるその姿に、男は気取けどられないように 眦まなじりの皺しわを深くする。

「楽しそうだな」

「そうかな？」



「……ああ」

父子の会話も、やがて雪化粧ゆきげしやうの彼方あなたへ。後には何も残らず、程なくして人が

居た痕跡こんせきも消え……しかしきつと彼女は、ここへ足を運ぶ度に今夜を思い出す

事だろう。あの奇妙なまで親切な、名前も知らない少年との、一時おうせの逢瀬おうせを。

未だ降りしきる雪は、あたかもその下に埋もれていく思い出ふたに蓋ふたをして、大切に保管してくれているようだった。